OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	デリダによるコンディヤック : 方法としての類比
Author(s)	小田, 昇平
Citation	待兼山論叢. 美学篇. 2014, 48, p. 19-40
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56615
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

デリダによるコンディヤック

──方法としての類比──

小田　昇平

キーワード：ジャック・デリダ／エティエンヌ・ボノ・ド・コンディヤック／
形而上学／類比／想像

はじめに

エティエンヌ・ボノ・ド・コンディヤック（Étienne Bonnot de Condillac, 1714-80）の処女作である、『人間認識起源論　*Essai sur l'origine des connaissances humaines*』（1746, 以下『起源論』）は、18 世紀フランスの啓蒙主義を代表する思想家による、同じく当世を代表する議題を提供することとなった著作である。いっぽう現代を代表する思想家のひとりジャック・デリダ（Jacques Derrida, 1930-2004）は、ガリレ社から 1973 年に刊行された『起源論』の序論として『たわいなさの考古学　*L'archéologie du frivole*』[1)]（1973）を執筆、これは初期のデリダによるコンディヤック読解の書となっている。

まずはコンディヤックの『起源論』がどのような著作であるかを概観しておこう。『起源論』はロックとニュートンとの影響のもとに執筆された著作であり、起源への関心、その実例となるモリヌークス問題、ルソーやヘルダーへと受け継がれることとなる言語起源論といった、先述のように当時の中心的な議題を提供している。彫像の思考実験においてその名を馳せる、『感覚論　*Traité des sensations*』（1754）の影響のため、コンディヤックの思想はしばしば感覚論 sensualisme として理解される。しかしながら、この評価は『起源論』においては必ずしも当てはまらない。というのも、コンディ

ヤックの関心は感覚主義的な認識論と、記号・言語の理論との両面に分かたれるからである。[2)] コンディヤックがよってたつこのふたつの側面は、すでに『起源論』において明確にあらわれている。コンディヤックの思想には感覚論ということばでは覆い尽くすことのできない射程がある。

『起源論』におけるコンディヤックの目的は、自らの研究を人間の精神へと限定したうえで、起源へと遡り、そこから正しく辿り直すことである。そのためには言語を正しくたてなおすことが必要となる。『起源論』においてコンディヤックが、この目的を達成するために提示し、また終生保持し続けることとなったその学問のための方法、それが分析 analyse である。

> 分析は、わたくしたちの観念を分解し構成することにこそある。この分解と構成とは、観念について様々な比較を行うためになされる。この手段によって、観念の間の関係が発見され、そして観念が生み出しうる新しい観念が発見される。分析は常に、わたくしたちを事物の起源へと立ち戻らせるので、この分析が発見の真の秘訣なのである。（『起源論』, 1, 2, 7, § 66, p.139.）

生前最後の著作となった『論理学　*La logique*』（1780）においては、この分析という方法が具体的に適用される様子を、コンディヤックはとあるひとつの機械を例にとって説明している。

> 事実、わたくしがあるひとつの機械を知ろうとするのであれば、その機械のそれぞれの部分を別々に検討するために、わたくしはその機械を分解することだろう。その部分の各々について正確な観念を手に入れ、そしてそれぞれの観念がそうであったのと同様の順序において、元の状態に戻すことができる。このときわたくしは、この機械について完全に理解したことになろう。わたくしはすでに、この機械を分解して再構成したのだからである。（『論理学』, 1, 3, p.27.）

このようにひとつのまとまりのあるものごとを分解し、その各々の部分について精査する。そして順序通りにまとめあげることによって、そのものごとを理解する。これがコンディヤックが保持し続けた方法である、分析の道程である。この方法を適応するためにコンディヤックには、いったい起源とは何のことであるのかを見通すという仕事が課せられることとなる。『起源論』執筆当時のコンディヤックが見抜いた起源とは、知覚 perception と行動言語 langage d'action とのふたつであり、それゆえに『起源論』はこのふたつを出発点として、今現在わたくしたちがあるような状況に至るまでの歴史が叙述されることとなる。[3)] すなわち、人間の精神の発展史と、言語の起源の歴史とである。その際に叙述される歴史において、コンディヤックの思想が展開されることとなる。

コンディヤックが思想を展開するその際に、いかにして知覚や行動言語から少なくとも今わたくしたちがあるような水準の人間の精神や言語へと至るのか、その際の動機についても言及する必要があるだろう。その動機は、不在のものを要求すること、今ここにないものを求めること、である。次に、このことを確認しておこう。

コンディヤックに特徴的な記述のスタイルとして、思考実験をあげることができる。先に触れた『感覚論』における彫像が著名であるが、『起源論』における言語起源論の子どもたちもまた、このスタイルに数え入れることができるだろう。『感覚論』では感覚をひとつずつ開いていくことによって、彫像がいかにして精神の働きを発展させていくかが、『起源論』における言語起源論においては、子どもたちが記号を獲得するまさにそのきっかけから、言語を徐々に形作り、少なくとも 18 世紀のフランス語に至るまでの歴史が、それぞれ示される。

『感覚論』では、不快な状態を抜け出すために、少なくとも今はそうではない快を追い求めること、これが精神の働きを発展させる動機となる。『起源論』においては、言語の起源について語る前に、ノアの大洪水の後しばら

くたった後の男女ひとりずつの子どもが、いかなる記号の使用をも知ることなく砂漠の中をさまよっていた、コンディヤックはこう仮定する。こうしたうえで言語起源の歴史を展開するのだが、彼ら最初の子どもたちは相互に交渉しあうことによって、情念の叫び声と知覚とを結びつけるようになる。それによって情念の叫び声は対応する知覚の自然的記号となるとされる。そうすることで記憶が働きはじめ、想像に作用して、自発的に観念結合を行うことができるようになる、それがコンディヤックが描いた順序である。その最初の記号を獲得するのは、以下の状況による。

> たとえば、その欲求を満たすために必要なものがないために苦しんでいる子どもは、叫びを上げずにはいられなかった。それを獲得しようと彼は努力し、頭、腕、そして身体全体を動かすのだった。もう一人の子どもはこの光景を見て心を動かされ、その同じ対象にじっと視線を注いだことにより、理由を表現できない感情が魂の中を満たすのを感じて、この哀れな子どもが苦しむのを見ることに苦しむのであった。この瞬間から、彼はその苦しんでいる子どもの苦痛を和らげることに関心を持ち、自分にできる限りでこの印象に従うようになった。（『起源論』, 2, 1, 1, §2, p.195.）

この子どもたちは共感と呼ぶべき能力を働かせ、お互いに必要なものを与え合おうとして苦しみ、そしてその苦痛を和らげるために行動した。そのきっかけは、「その欲求を満たすために必要なものがないこと」である。したがって、そのきっかけとなるのは、不在のものを要求すること、今ここにないものを求めることである。

以上、『起源論』がどのような著作であるかを概観するとともに、コンディヤックによるその方法が分析と呼ばれるものであり、この方法は分解と構成との二重の操作を含意しているということが示された。彼独自の思想を展開するための思考実験と呼ばれる特徴的なスタイルがあり、そこでは歴史

が要求されていることについても言及した。またコンディヤックによるその思考実験において、精神や言語を発展させるための動機として、不在のものを要求すること、今ここにないものを求めることが含意されていることが示された。以上を踏まえた上で、デリダはこの『起源論』に、ひいてはコンディヤックの思想に何を見出したのか、『たわいなさの考古学』から確認してみよう。デリダは『起源論』について、以下のように述べている。

> 『起源論』の主な貢献、最も独創的な前進は、『起源論』を執筆している時のコンディヤックにとって、実のところ、記号の理論そして記号の類比の理論であった。(『たわいなさの考古学』, p.62.)

『起源論』におけるコンディヤックの白眉は、記号の理論、そしてさらには記号の類比の理論であると、デリダはいう。そればかりではない。類比はコンディヤックの思想の核心であるとまで、デリダは考えている。そうだろうか。コンディヤックをどう論じれば、そういえるだろうか。本論文の目的は、その是非を仔細に問いなおすところにある。

1. デリダによるコンディヤックの形而上学

> コンディヤックを読まんとし、そのテクストに対して自分を閉ざすまいとするならば、あるいは構成され生じてくる一連の対立の前で立ち尽くしたくないならば、感覚論を記号論へと発展させる論理 logique、いやむしろ類比 analogique に至る必要があるのだ。(*Ibid.*, p.25.)

デリダはこの書において、コンディヤックにおけるいくつかの二項対立、よい形而上学と悪しき形而上学、生成と計算、二つの想像などを確認した後、以上のように述べる。デリダはコンディヤックの思想から、類比にとりわけ関心を寄せていることがわかる。まずは『たわいなさの考古学』におけ

る、デリダのコンディヤック解釈を確認しておこう。デリダによると、『起源論』は名前を持たない学問に該当するものであり、それを可能とするためには、いわゆる形而上学を批判する必要がある（*Ibid.*, p.15.）。『起源論』における、コンディヤックにとっての形而上学の定義は以下のとおりである。

> 精神を明敏で正確で広闊にするのに最も貢献するところの学問、したがって他のすべての研究を準備せねばならないところの学問、それが形而上学である。（『起源論』, 序論, p.99.）

形而上学をこのように定義した上で、コンディヤックはさらに、『起源論』の冒頭において形而上学を二種類に区別する。すべての神秘を見透かそうと望む野心的な形而上学と、もう一つは自らの探究を人間精神の弱さに見合ったものにする、より慎み深い形而上学とのふたつである（*Ibid.*, p.99.）。コンディヤックにならって、しかし異なった仕方でデリダもまた、コンディヤックによる形而上学を二つに分類する。

> コンディヤックは、本質と原因との形而上学の代わりに、現象と関係（「連関」）との一つの形而上学を打ち立てることを、すみやかに提案する。隠されたものの形而上学の代わりに、開かれたものの一つの形而上学、ものごとそれ自体の現象学、限界に関わる批判的学問、と言うこともできよう、を打ち立てようとするのである。（『たわいなさの考古学』, p.15.）

デリダの解釈では、野心的な形而上学は本質と原因との形而上学であり、より慎み深い形而上学は現象と関係の形而上学である。デリダが見出した後者の形而上学、コンディヤックが打ち立てようとする新しい形而上学は、現実の単独性から出発して、観念の生成の諸原理、一般的観念の最初の産出を系統立てて復元しようとする、適切には分析、あるいは分析的方法と呼ばれ

ることとなるものである（*Ibid.*, p.17.）。『起源論』におけるコンディヤックの目指したものは、分析によって観念の最初にまで遡ってその生成を辿ること、それによって新しい観念や言語を作り直すことであった。したがってコンディヤックによる新しい形而上学は、分析によって起源への遡及と起源からの回帰を目指すこととなる。分解することのみならず、構成すること、組み立てることがコンディヤックの分析には含まれている。この分析について、ル・ロワは以下のように述べている。

> コンディヤックによれば、すべて分析は、二重の操作を想定している。すなわち、分解の作業であり、全体のなかにそれを構成する諸要素を識別しようとするもの。そして再構成の作業であり、その目的は区別された諸要素が連鎖している、その順序を見つけ出すことにある。（Le Roy, pp.204-205.）[4)]

ル・ロワが指摘する通り、コンディヤックの分析は以上のような分析と構成との「二重の操作」からなり、要素の連鎖するその順序を見つけ出すことを通じて、新しい言語活動の実践を目指すこととなる。それというのも、コンディヤックが新しい言語活動の実践を目指さねばならない理由は、人間の精神が誤謬に陥るのが、言語の悪しき使用にあるとされるためである。デリダは、コンディヤックが形而上学を二分したのと同様に、よい形而上学と悪しき形而上学とのふたつに形而上学を分類する。悪しき形而上学に対しては、以下のように提言がなされるであろう。

> したがって、この形而上学を矯正できるのは、ただ記号と言葉との別の理論を練り上げることによって、別の言語活動を実践することによってのみである。（『たわいなさの考古学』, p.18.）

したがって言語と記号との新しい理論が必要となる。この言語と記号と

の新しい理論を求めることは、『起源論』から遺稿となる『計算の言語　*La langue des calculs*』（1798）までの、コンディヤックの課題であった。この新しい別の言語活動の実践は、コンディヤックによれば、分析によって言語ないしは記号の最初にまで遡り、正しく言語を作り直すことによってこそ、可能となる。つまりは分析という方法に基づけば、新しい言語活動の実践が可能となる、というのがコンディヤックの目論見であった。デリダはこれを、よい形而上学に従うことと解釈する。しかしながらこのときの形而上学は、今までの形而上学とは別の、よい形而上学、すなわち自然な形而上学、言語に先立つ形而上学に従うこととされる。デリダによる形而上学の分類は先に見たとおりであるが、デリダはさらに、よい形而上学の中にも二つの区別を立てる。

> 前言語的な起源、「本能」、「内的感覚」といった形の下でのよい形而上学と、極限的な言語的な錬成、新しい言語、「反省」といった形の下でのよい形而上学。（*Ibid.*, p.19.）

デリダはこのように、よい形而上学として、本能としての形而上学と学問としての形而上学とを、コンディヤックのうちに見出す。本能としての形而上学は実践、学問としての形而上学は理論に関わるものである。同様にこの関係が、内的感覚 sentiment と反省 réflexion という形で学問としての形而上学にも見出される。先に新しい形而上学が、現実の単独性から出発して、諸原理や一般的観念の最初の産出を系統立てて復元しようとすることを指摘しておいた通り、デリダによれば、コンディヤックの理論に見いだせるこの関係は常に、実践的なものが先行する。したがってこの関係のうちには、実践が先行する歴史という一般法則が打ち立てられている。本能としての形而上学がつねに、学問としての形而上学に先行し、内的感覚がつねに、反省に先行する。つねに、事実があることを前提としており、それについて理論は後からついてくることとなる。

コンディヤックが打ち立てようとする新しい形而上学は、分析、あるいは分析的方法によるものであった。この際にとられることとなる具体的な方法もまた、実践が先行する歴史という一般法則に則ることとなる。具体的には、まず分析によって、実践がどのように成功したかを示し、その後でどのようにすればさらに成功することができるかを示す、というものである。したがって、すでに成功したという事実が要件として必要となる。かくてデリダに従えば、『起源論』について以下のように述べることができるだろう。

> 最初の結論はこうだ。『起源論』は、原理となるべき第一科学でもなければ、準備運動をととのえる方法理論でもない。すなわち一般理論である。したがって、これを採りあげて結論を引き出そうとするなら、この一般理論に「先立って」、それなりの知を展開しておかねばならない、あるいは手に入れておかねばならない。……ある学問がまずあって、その歴史を「たどるうちに」、この一般理論はできあがってくるのである。（*Ibid.*, p.20. 強調部原著。）

デリダによれば、コンディヤックの理論においては実践が常に先立ち、それを理論が追いかける。このことは学問においても同様である。したがって、学問上のある事実を前提として、それを後から追いかけることによって、新しい結論が引き出されることとなる。デリダによればコンディヤックの方法は、このように後からやってくるものである。

デリダによるこのコンディヤックの分析的方法の解釈は以上のように素描できる。すなわち、コンディヤックのいうところの形而上学が二種類あり、そのうちのよい形而上学をこそ目さねばならない。分析によって可能となるよい形而上学によって、記号と言語との正しい使用を追求するためには、さらにふたつに分かたれるよい形而上学、本能としての形而上学と学問としての形而上学とのうち、本能としての形而上学に倣う必要がある。ここから、本能としての形而上学、内的感覚、あるいは事実が、学問としての形而

上学、反省、そして理論につねに先立つものであることが示される。つまりはふたつのよい形而上学の間には、つねに実践が先行する歴史が存する、ということになる。すでにあるものからコンディヤックがはじめる、というこのデリダの解釈は適切であろう。ひとつのまとまりのあるものごとを分解し、その各々の部分について精査、そして順序通りにまとめあげることによって、そのものごとを理解する、これがコンディヤックの分析という方法であったのだから、その対象であるものごとはすでにあるものでなければならないからだ。デリダの解釈においては、だからこそ、本能としての形而上学が学問としての形而上学に先行する。コンディヤックの形而上学は、その内部にすでに模範があり、それにしたがって学問を構築することで、誤謬なきことを得る、というわけだ。そのためにデリダは、後にみる「同定命題」« proposition identique » や分析判断 jugements analytiques[5] を導入することとなる。この両者はともに、主語のうちに述語が入り込んでいるものであるのだが、これによってコンディヤックは、起源へと遡ることになるとデリダは考える。

つねに実践が先立つ理論である、このコンディヤックの道程は、コンディヤックが打ち立てようとする学問を考察する上でも同様である。先に触れたとおり、コンディヤックの思想において一大転機をもたらすのは、不在のものを求めることであった。『感覚論』では彫像がいかにして精神の働きを発展させていくかが、『起源論』における言語起源論では、子どもたちが記号を獲得するまさにそのきっかけが、それぞれ不在のものを追い求めることによって作動するのであった。不在のものが不在であることを知るためには、少なくともかつてそれがあったことが必要であるのだから、そういった実践が必ず先行する。そしてこのメカニスムは、学問においても同様である。したがってコンディヤックは、まったく新しい学問ではなく、自らの探究を人間精神の弱さに見合ったものにする、より慎み深い形而上学をこそ、つくりあげようとする。しかしそれはどうやって可能となるのか。すでにあるものから、はじめよう。つまりは、ロックやニュートンから、はじめればよいのだ。[6]

> 道を切り開く哲学者とは、過去の断絶という事実を一般化させて反復する人、この事実を移しかえ、拡張する人である。こうしてロックは開始するのだが、ベーコンとニュートンの「後から」開始する。／コンディヤックもロックの「後から」開始するのである。（*Ibid.*, p.22. 強調部原著。）

そしてこれは、ある発見、天才のひらめき coup de génie によって可能となる。デリダによれば、天才のひらめきとは、「哲学的秩序の内で、一つの発見、あるいは天才の学問的ひらめきを移しかえる」（*Ibid.*, p.21.）ものであり、同様に敷衍すると、学問的発見は別のもう一つの発見を移し替えることによるものとなる。こうして分析的方法、あるいは類比によって、テクストは開かれることとなる。

2. 類比

先に見たとおり、デリダはコンディヤックの道程を、移し替えること transposition にみるのであった。具体的には、ロックが、特にニュートンの後から開始することで、移し替える。ロックは、ニュートンが提示した一般法則を、人間知性の学問へと移し替えた。そうすることでロックは、ニュートンがなしたこととの類比によって新しいものを見出した。デリダによれば類比が支える発見が、このように移し替えることによってなされることとなる。

> ロックが取り組んだ移しかえと適用の働きは、とりもなおさず、創造したり構成したりするものだった。類比を用いてロックは未知のものを発見したのだ。類比による発明、これがおそらくこの論理のもっとも一般的な定式であろう。類比（類比一般、あるいは比例 proportionnalité に

よる数学での類比）について言えることは、分析についても言えるのである。あたらしい「考察対象」を構築するには、移し替えたり、釣り合いを見つけたりするだけでなく、それと同じ程度で、すでにそこにあるものを分析したりということもおこなう。だからこそ学問が進歩し、知が豊かになるはじまりにはつねに、とコンディヤックは倦むことなく主張しているわけだが、[「これとこれとは同じものだ」という]「同定命題」« proposition identique »、つまり、分析にもとづく判断がある。（*Ibid.*, p23. 大括弧内引用者。）

真であることを、類比によって移し替えることが要である。事実、ニュートンを範としてロックがなしたように、ロックを範としてコンディヤックも同様の道を進むだろう。そのためには、ここで提示されている「同定命題」、そして分析判断が必要なのである。つまり、どういうことか。

「同定命題」のルール、分析のルールが意図する内実は、系統図をたどって単純なものへ回帰するということである。さらにいえば、段階的な発展が起こるとしても、それ自体は不変であるところの素材が、ただただ組み合わさったり、変更を加えられたりした結果なのだということである。これが感覚作用だ。それこそが第一の素材（質料）である。形を付与され、形を変更され、組み合わされ、連合させられて、この第一の素材から、あらゆる知識が生み出される。（*Ibid.*, p.25.）

デリダは、コンディヤックにおける「同定命題」や分析に、感覚作用への回帰を見出している。感覚作用の組み合わせや変更によって発展が生じることを見出している。こうして最初の素材である感覚作用から、ひいてはあらゆる知識が生み出されることとなる。ここからデリダは、類比に至ることによって、感覚論を記号論へと発展させる（*Ibid.*, p.25.）と述べることとなる。デリダによるとコンディヤックは、この記号と言語の理論を、感覚的、要素

的である胚を発展させるもの、「展開利用」するものとしての体系として位置づけている（*Ibid.*, p.26.）。

> 不変の胚であるものが、やがて発展していくという、対立を孕む両者の構図は、内容と形式の対立、素材とその展開利用の対立を映している。類比の原理、つまり類比による分析法が、ここで対峙する両項のあいだに、行き来、一体化を可能にし、統合体系化する力も保証してくれる。したがって、この類比の原理つまり類比による分析法こそが問われねばならない。（*Ibid.*, p.26.）

デリダによれば、この胚と、その発展との二つの項は類比の原理が関係づける。生成と組み合わせ、すなわち生成と計算との二項はふつう対をなすが、コンディヤックにおいて、その対のありかたは、対峙しながらの両立である。後世の解釈において矛盾と捉えられたこの生成と計算という一幅対のために、コンディヤックは新しい論理を要求している、とデリダはいう。

> これが主張する新しい論理はこうだ。与件は単純なものであり、数も限られている。それなのに、新たなものが加わってくるという事態が生じるのは、与件相互のあいだに類比が見出されて、連結化ないし複雑化される、その結果であり、それ以外のなにものでもない。（*Ibid.*, p.38.）

新しいものは類比的な連関によって、すなわち既存の単純なものの連結化ないしは複雑化によって、加わっていく。所与のものしかないところに、新たなものの付加という、ありえないはずの事態が出来する。この事態をコンディヤックは、感覚の哲学を離れずに、ただ類比概念を導入することで説明する、これがデリダの考えである。このとき所与のものと新たなものは、対となるものの二つの項であり、この両項を、類比に基づく感覚作用が操作している。感覚作用に操作される両項は、ルールにしたがう記号である。こう

して感覚の哲学はさらに、記号の哲学へと変貌する。その記号の哲学のなかで、この新しい組み合わせを可能とし、新しい論理、新しい学問を打ち立てるには、天才の所業が必要となる。

> 新しい学問の出現は天才のひらめき、個人としての天才のひらめきに由来している。個人としての天才の根本的な性質は想像であるように思われる。（*Ibid.*, p.39.）

新しい学問は天才のひらめきに由来するものであるが、この天才のひらめきは言語によるものである。天才はその能力を言語に向けることになり、言語を進歩させるのであるが、この可能性は逸脱 écart の可能性、言語を崩壊させる可能性でもある。凡庸な者達がこれを真似すると、取るに足らないものが幅をきかせることとなるからだ（*Ibid.*, p.42.）。このようにデリダによれば、コンディヤックの分析という方法は、そのうちにすでに派生しうるものを孕んだ胚を「同定命題」や分析判断によって発展させることで成立するものである。この胚と発展、すなわち生成と計算との靭帯となるものが類比であり、類比を可能にする天才の逸脱は、想像によって可能となる。

3. 想像

『起源論』における想像を確認しておこう。『起源論』においては、認識の素材として感覚と魂の作用とが提示される（『起源論』, 1, 1, 1, §5, p.108.）。魂の作用とは何を指すのだろうか。

> 魂の作用全体の方向を、知覚、意識、追憶、注意、想像に限定しなければならない。そして最後の二つの行使については、自由にそれを調整することができないようなものと仮定せねばならない。（*Ibid.*, 1, 2, 11, §108, p.155.）

この中でも重要なのは観念結合の原因となる注意で、それによって想像、観想、記憶といった働きが生じる。想像は、私たちの持つ最初の能力の一つであるが、その時の想像とは眼前にない対象の知覚自体を思い浮かべる受動的なものである。

> 記憶が獲得されると、その人は自分自身で自分の想像を自由に使いはじめ、想像に新しい働きを与えはじめる。（*Ibid.*, 1, 2, 4, § 46, p.131.）

ここではじめて想像は自発的に観念結合を行うことができる能動的なものとなる。注意を自在に遂行できるようになると、反省が生じる。そしてまた逆に、反省は自らを生む原因となった記憶と想像とに影響を及ぼす。このようにして反省が可能になったことにより、分析を含む様々な働きが可能となり、ひいては知性全体の働きが形成される。『起源論』における想像について、デリダは以下のようにとらえている。

> 『起源論』の問題圏全体は「想像」という語の二つの意味のあいだに広がっているといえよう。つまり、対象の輪郭をあらためてたどる再生的想像（このときの観念連合はいわば繋ぎ合わせにすぎない）と、対象を補完するために、その再生的想像に、何かをさらに［余計に］付け加える創造的想像とのあいだに横たわっているのである。（『たわいなさの考古学』, p.49. 大括弧内引用者。）

以上のように、『起源論』における想像には二種類がある。まずは類比的連関や反復により、かつてそこにあったであろう対象の輪郭をあらためてたどり、再生する。コンディヤックがその思想を展開する際に、知覚や行動言語から、現在の人間の精神や言語へと至るその動機については、現在するものが不在になることにより、不在のものが要求され、今ここにないものを求

めることによるのであった。この想像が不在のものを要求し、ひいては記号を要求することとなる。もう一つは対象を補完するために、何かをさらに付け加えて創造する。創造はしばしば「同定命題」や分析判断といった、自身のうちにすでに派生しうるものの範疇を超え、その結果、言語に余計で曖昧なものをもたらす危険性を孕んでいる。この創造的想像による逸脱が、天才によってなされる限りは、言語は進歩することができるが、凡庸なものたちが逸脱へと踏み越えれば、言語は退廃を招くこととなろう。そうした欠陥を解消するには、記号以前の本能、つまりはよい形而上学にまで遡って、改めて新しい言語を生み出す必要がある。だがそのとき、必要と考えられただけのものを付加したつもりが、余剰、価値の過剰、取るに足らない無益なもの frivole futilité が姿をあらわし（*Ibid.*, pp.68-69）、言語の欠陥を解消し得なくする可能性がある。では取るに足らなくならずに言語の欠陥を首尾よく解消するには、どうすればよいのだろうか。そのためには必然性がない、あるいは空疎である記号を避ける必要がある。

> したがって、取るに足らないものでないようにするには、非＝同定という、意味論からいえば危険でしかないものに跳び込むほかないのである。コンディヤックがこの非＝同定を隠喩と名づけ、言語活動の根源構造と見なすのは、類比および論証の目的をあらためて自分の手もとに引き寄せようという、まさにそのためである。[「同定命題」のルールをいったん放棄して、非＝同定を導入しながらも、なおかつ類比をふたたび手もとに呼び寄せるという] この道筋は実は、行動言語を論じる初めからずっと一貫してたどることができるものである。行動言語が隠喩への道を拓くわけだ。それに続くさまざまな修正、そのすべてによってこの道をたどるための補完修正が行われる。最終地点には、これ以上ないほどに形式的である計算言語がある。してみれば、計算言語もまた、[人工のものではまったくなくて、] ごくごく自然なものなのである。（*Ibid.*, p.90. 大括弧内引用者。）

デリダは、コンディヤックにおける最初の素材である感覚作用からあらゆる知識を生み出すために、そのための条件をうちに含んでいる「同定命題」や分析判断を見出していた。しかしこれだけでは取るに足らないものが混入し、言語の欠陥を解消できなくしてしまう可能性がある。この状況に陥らないためにコンディヤックはあえて、「同定命題」や分析判断とは異なるものである非＝同定を導入し、それを言語本来の構造であると突き詰めて考え、取るに足らないもの、必然性のない、空疎な記号を避けようとした。デリダによればこれは、コンディヤックの言語起源論における最初の言語である行動言語から計算言語へ至るまで採用されることとなる。行動言語において足りないものを補完するために想像が加担し、必要なものを付加するのだから、先に見た余計なものが入り込む危険性が、行動言語からすでに存在するからだ。この曖昧なものを避けて、よい形而上学が成立するような言語を成立させるためにはどうすればいいのか。すでに成功している方法を類比によって移し替えればよい、デリダのコンディヤック解釈はこのように教える。よい形而上学を類比によって移し替えることで、よい形而上学が成立する言語活動が可能となるはずだ。したがって、実際に成功した学問的なモデルはもちろん、よい形而上学、本能としての形而上学、実践としての形而上学が移し替えられることで、理論としてのよい形而上学が成立できるようになるはずだ。こうして、類比は方法となる。

> 類比は言語と方法とを形作る。類比のおかげで、ある言説のここからあそこへと往き来することが可能になり、その道筋が均される。ある学問モデルを、その分野だけでなく、あの領域へも、移し替えることができるようになる。類比は、方法という観点からすれば、一貫性を目指している。しかり、それ自体が「方法」なのだ。（*Ibid.*, p.53. 強調部原著。）

類比は自然を模倣して、自然の産出を拡張するものであるから限界を持た

ず、無限の一般性を持つことになる。そのような類比を方法とすることで、最終的にはよい形而上学が打ち立てられるだろう。デリダは、コンディヤックにおける分析的方法を類比と解釈することで、現前する現象と、それとの何らかの関係（あるいは連関liaison）とを結びつけるものとする。コンディヤックの類比はこうして、方法を形作るのみならず、言語も形作り、誤謬なき人間精神を導くこととなる。コンディヤックのテクストは開かれたものとなり、ロックやニュートンのテクストとの連関をなし、すでにあったものに新しい意味を、つまり今までなかったものを、付与することとなるだろう。こうして、逸脱の危険を冒しつつ、道を切り開くために、新しい意味がすでにあったものから成立していく。この歩みは、言語の退廃を招くその間際まで、推し進められることとなるだろう。

おわりに

形而上学を二つに区別するコンディヤックと同様に、デリダもコンディヤックのうちに悪しき形而上学とよい形而上学との二つを見出す。さらによい形而上学は、本能としての、実践としての形而上学と、学問としての、理論としての形而上学とに分かたれる。前者はつねに、後者に先立つものである。実践が理論に先行するということの歴史は、学問についても移し替えられる。『たわいなさの考古学』冒頭において、デリダがコンディヤックにならって形而上学を区別することもまた、デリダがコンディヤックに見出した類比による方法を実践しているのだということができるだろう。ロックがニュートンに、そしてコンディヤックがロックにならって行った類比による学問上の発見を、デリダがコンディヤックにならって行うこととなる。分析によって見出された成功を、類比によって他所においても成功させることができるように移し替える。新しい言語もまた、このように類比によって新しいものを付加する天才の所業によって可能となる。しかしその際には、既存の言語からの逸脱が生じうる。二種類が存在する想像についてもまた同様

で、既存の対象に足りないものを補完するために、必要なものを付加するのであるが、その際に曖昧なものが入り込む余地がある。これは結局、すでに成功している方法を移し替えることで、より詳しくは、外からはすでに成功した学問的なモデルを、内なるものとしては本能としての、実践としての形而上学を移し替えることによって、曖昧なものを防ぐことが可能となるだろう。そのための方法が、自然に範をとる、限界を持たない類比という方法である。

デリダはコンディヤックの思想のうちに、このような拡張可能性と、それを成立させる方法の危うさとを感じ取っている。だからこそデリダは、「同定命題」や分析判断といったそれ自体のうちに胚があるものごと、あるいは本能としての形而上学に立ち返るというモデルをコンディヤックの思想のうちに見出して、不安定な意味の拡張を可能としている。コンディヤックが採用したとされるこの方法は、一歩間違えると暴走し、言語の退廃を招くこととなるものであるために、デリダはこの方法を成立させるための境界線を慎重に描き出す。その最中、コンディヤックの思想の持つふたつの側面である感覚論と記号・言語論とを類比によって結びつけてみせたデリダにより、範とすることのできるテクストとして、コンディヤックの思想を新たに開き直すことが可能となる。

［注］

1） *L'Archéologie du frivole* という書名の訳語については、便宜のため、邦訳である『たわいなさの考古学』に従った。

2） 『感覚論』においては記号や言語への関心は提示されない。というのも『感覚論』における彫像はひとりきりなのであるから、記号や言語を用いる基盤が形成されないからである。『起源論』において展開される言語起源論においては、ノアの大洪水の後しばらくたった後の男女一人ずつの子どもが、いかなる記号の使用をも知ることなく砂漠の中をさまよっていた、コンディヤックはこう仮定する（『起源論』, 2, 1, 15, § 163, p.267.）。こうすることでコンディヤックは、言語を用いる基盤である最小限の社会を設定する。なお、記号や言語への関心は、後年の『論理

学』において再び詳述されることとなる。

3） タケサダは、このふたつの時間を、「魂の作用と、記号使用との二重の歴史 la double histoire des opérations de l'âme et de l'usage des signes」と表現している（Takesada, p.47）。Tomoko Takesada, « Imagination et langage dans *l'Essai sur l'origine des connaissances humaines* de Condillac » dans *Condillac et les problèmes du langage,* pp.47-58., éd, par Jean Sgard, Genève-paris, Editions Slatkine, 1982.

4） Georges Le Roy, *La psychologie de Condillac,* Boivin, Paris, 1937.

5） 「同定命題」および分析判断については、飯野和夫「デリダのコンディヤック論――『たわいなさの考古学』解題――」、および飯野和夫「デリダのコンディヤック読解　――自同性の問題を中心に――」に詳しい。なお、自同的命題とは、本論にて同定命題と訳出した « proposition identique » のことである。「デリダのコンディヤック論　――『たわいなさの考古学』解題――」においては、「自同的命題」は主語が述語として反復される命題を指し、「分析（的）判断」は主語の概念の内にすでに述語の概念が内包されている判断を指す、カントに由来する用語であることが示されている。飯野によれば、「自同的命題と分析判断とは、同じ概念間の関係を、命題と判断という異なった観点から考察していると考えてよい。」（「デリダのコンディヤック論　――『たわいなさの考古学』解題――」, p.16.）

6） 『起源論』の 1756 年出版の英訳に、*An Essay on the Origin of Human Knowledge, Being a Supplement to Mr. Locke's Essay on the Human Understanding.* という題が与えられていることは興味深い。

［参考文献］

デリダの著作と用いた版

L'Archéologie du frivole, Galilée, Paris, 1973.

Essai sur l'origine des connaissances humaines précédé de L'Archéologie du frivole par Jacques Derrida, Galilée, Paris, 1973.

『たわいなさの考古学　コンディヤックを読む』飯野和夫訳、人文書院、2006 年。

コンディヤックの著作と用いた版

Essai sur l'origine des connaissances humaines, Pierre Mortier, Amsterdam, 1746.

Essai sur l'origine des connaissances humaines précédé de L'Archéologie du frivole par Jacques Derrida, Galilée, Paris, 1973.

『人間認識起源論』（上）古茂田宏訳、岩波文庫、第 1 版 1994 年、第 2 版 2003 年。

『人間認識起源論』（下）古茂田宏訳、岩波文庫、第 1 版 1994 年、第 2 版 2003 年。

Traité des sensations, a Madame la Comtesse de Vasse. A Londres, et se vend à Paris, chez

de Bure l'aîné, 1754, 2 Volumes.

Traité des sensations ; traité des animaux, Fayard, Paris, 1984.

Condillac's treatise on the sensations, translated by Geraldine Carr, The Favil Press, London, 1930.

Philosophical writings of Etienne Bonnot, Abbé de Condillac, Translated by Franklin Philip with the collaboretion of Harlan Lane, Hillsdale, London, 1982.

『感覚論』(上)、加藤周一・三宅徳嘉訳、創元社、第 1 版 1948 年、第 2 版 1949 年。

『感覚論』(下)、加藤周一・三宅徳嘉訳、創元社、第 1 版 1948 年、第 3 版 1949 年。

La logique, ou les premiers développements de l'art de penser, Paris : L' Esprit et de Bure l' aîné. 1780.

Oeuvres de Condillac. A Paris, de l' imprimerie de Ch. Houel, 1798.

ルネ・デカルト『方法序説』、谷川多佳子訳、岩波文庫、1997 年第 1 刷。

Georges Le Roy, *La psychologie de Condillac*, Boivin, Paris, 1937.

飯野和夫「デリダのコンディヤック論 ――『たわいなさの考古学』解題――」『言語文化論集』28 巻第 1 号(2006 年 10 月 31 日)、3-20 頁。

飯野和夫「デリダのコンディヤック読解 ――自同性の問題を中心に――」『言語文化論集』30 巻第 2 号、(2009 年 3 月 30 日)、21-52 頁。

Tomoko Takesada, « Imagination et langage dans *l'Essai sur l'origine des conaissances humaine* de Condillac » dans *Condillac et les problèmes du langage*, pp.47-58., éd, par Jean Sgard, Genève-paris, Editions Slatkine, 1982.

(大学院博士後期課程単位取得退学)

RÉSUMÉ

Condillac par Derrida
L'analogie comme la méthode

Shohei Oda

Nous essayons de suivre et analyser la pensée de Jacque Derrida sur Étienne Bonnot de Condillac.

Derrida traite Condillac dans *L'archéologie du frivole*, qui est écrit comme la préface de *l'Essai sur l'origine des connaissances humaines* de Condillac. Dans *L'archéologie du frivole*, Derrida trouve « l'analogie » comme la méthode dans le système de Condillac.

Condillac insiste sur sa méthode nommé « l'analyse » de *l'Essai* à *la logique* qui sont ses première et dernière œuvres. Cette analyse de Condillac comprend une double opération, c'est-à-dire, décomposition et (re)composition. Par cette analyse, on peut arriver au langage parfait pour faire nos esprits sans erreur, et Condillac remonte à l'origine des opérations de l'âme et de l'usage des signes, autrement dit, la perception et le language d'action et les compose sans erreur. Pourquoi Derrida a nommé l'analogie à l'analyse de Condillac ?

Parce que Derrida trouve plusieurs dualités, par example, la bonne métaphysique et la mauvaise métaphysique, le germe et le développement, les deux sens du mot imagination, etc., et le principe de l'analogie pour assurer le passage, l'unité, le pouvoir synthétique entre les deux termes de cette opposition dans le système de Condillac. « L'analogie, Derrida dit, fait la langue et la méthode. Elle rend possible et homogène le passage d'un lieu du discours à un autre, le transport d'un modèle scientifique dans un autre champ. Elle est elle-même l' unité de méthode, *la* méthode. » Comme ci-dessus, l'analogie de Condillac que Derrida trouve peut comprendre et justifier cette dualité ou cette opposition.

Par cette analogie de Condillac, on peut étendre le région de language et de l'esprit humain, cependant il y a quelque risque qui génére les erreurs et la frivolité. Pour éviter ces erreurs et cette frivolité, Condillac introduit la non-identité qui a risqué le language pour l'avènement d'une science nouvelle. Derrida trouve la démarche risquée de Condillac, et c'est dans ce point que Derrida trouve la force de la pensée de Condillac.